

『ラージャタランギニー』の第 8 章について
—複数のバージョンが共存していた可能性—

鈴木 知子

1 序

『ラージャタランギニー』(*Rājataranṅinī*) は、12 世紀に Kalhaṇa がサンスクリット語の韻文により著したカシミールの王統紀である。Kalhaṇa は 7,826 詩節を用い、伝説の初代王に始まり執筆当時の王に至るカシミール諸王の事績を語っている。全 8 章のうち、第 7 章で語られているのは Kalhaṇa の父親が活躍した第一ローハラ王朝の時代であり、第 8 章は Kalhaṇa 自身が生きた第二ローハラ王朝の時代である。両章には他の章より多くの詩節が割かれているが、とりわけ第 8 章は全詩節数の 4 割以上を占める。第 8 章末には、Kalhaṇa が同章を西暦 1149/50 年に書き終えたことを示す詩節がある¹。

『ラージャタランギニー』の第 7 章および第 8 章については、この作品が西洋の学者に知られるようになった 19 世紀前半当初から、Kalhaṇa の真作ではないという説があった。この説は Bühler [1877: 55–58] と Stein [1900: Vol.1, 42–44] によって 19 世紀後半に否定され、以後は殆ど議論の俎上に上っていない。しかし、今日改めて 19 世紀の議論を振り返ってみると、第 7 章と第 8 章が一体であるという前提に誤りがあったように思われる。Kalhaṇa が序文で述べている執筆趣旨²との整合性や文学的な質などに鑑みれば、この作品の最終章に相応しいのは第 7 章であり、Kalhaṇa の真作であるかどうかが問われるのは第 8 章のみではないかと思われる [鈴木 2020]。

『ラージャタランギニー』の研究に最大の功績を残したのは M. A. Stein である。Stein は 19 世紀末に良質な写本を入手し、これに基づいてこの作品の校訂と英訳を行った [Stein 1892, 1900]。今日も、『ラージャタランギニー』の研究は専ら Stein 校訂版に依存して行われている。しかし、20 世紀に入ってから、Stein が存在を把握していなかった写本断片が新たに確認され、部分的に出版されたことはあまり知られていない。この写本の第 8 章には Stein 校訂版と大きく異なる部分があった。しかし、その点については当時それ以上の

¹ samādvāviṃśatī rājyāvāpṭeḥ prāg bhūbhujo gatā /
tāvaty evāptarājyasya pañcaviṃśatīvatsare // 8.3404 //
(Jayasiṃha) 王は (生誕より) 22 年が経過した後に即位した。ラウキカ暦 4425 年 (西暦 1149/50 年) 現在、王の即位から同じ年数が経過した。

² Kalhaṇa は、歴代の王の盛衰を語ることによって、聴き手を śānta (寂靜) の境地に誘う意図を明らかにしている。

kṣaṇabhaṅgini jantūnām sphurite paricintite /
mūrdhābhiṣekaḥ śāntasya rasasyātra vicāryatām // 1.23 //
人間が突然現れて一瞬のうちに壊れてしまうものであることを深く考え、この作品においては śānta という rasa の頭頂灌頂を思慮すべきである。

追及は行われず、異なる部分を持つ伝承が存在した経緯は未だ解明されていない。

Stein 校訂版と異なる部分を含む写本の存在は、『ラージャタランギニー』に二つ以上のバージョン³が伝わっていたことを示唆している。どの部分のテキストがどのように伝承されていたのかという問題は、『ラージャタランギニー』の最終章が第7章と第8章の何れであるかについての議論の行方を左右する重要な論点である。そこで本稿では、現存する二つのバージョンの成立過程を探り、そこから第7章・第8章問題についてどのような情報が得られるかを検討する。

2 『ラージャタランギニー』の主要な写本

これまでに存在が確認されている『ラージャタランギニー』の写本は、既に所在不明となっているものも含め、約30を数える。その半数近くは不完全な写本であり、特に第7章と第8章を欠いている場合が多い。当初この2章が Kalhaṇa の真作であるかどうかが疑われたのはそのためでもある。殆どの写本は近代に作成されたものであるが、以下では、『ラージャタランギニー』の研究において特に重要度が高い3つの古写本について述べる。

2.1 Stein が校訂に用いた A 写本 [Stein 1900: Vol.1, 45–50] [Bühler 1877: 7, 52–55]

1823年に旅行家の W. Moorcroft がシュリーナガルで『ラージャタランギニー』の写本 (devanāgarī 文字) を入手し、ベンガル・アジア協会 (Asiatic Society, Bengal) にもたらした。この写本は全8章からなっていた。外国の研究者はこの時に初めて全章揃った『ラージャタランギニー』の写本を手にしたことになる。この写本 (以下、Moorcroft 写本) に基づき、『ラージャタランギニー』の最初の校訂がベンガル・アジア協会によって行われた (カルカッタ校訂版, 1835年公刊)。しかし、この写本は Moorcroft の依頼により śāradā 文字の写本から転写されたものであったため、śāradā 文字から devanāgarī 文字に写す際に数多く誤りが生じていた。また、校訂に携わった人々がカシミールに関する知識を十分持っていなかったこともあって、最初の校訂は満足すべきものとはならなかった⁴。

1875年に G. Bühler が写本を求めてカシミールを訪れ、現存最古と言われる『ラージャタランギニー』の写本 (śāradā 文字) に出会った。Bühler は、この写本がカシミールに所在する全ての写本の源であるとの説明を受け、また、自身が知っている半ダース程の写本とこの写本が重要な点において一致していることを確認した。カルカッタ校訂に用いられた Moorcroft 写本もまたこの写本から転写された可能性が高いと思われた⁵。数年後、Stein はこの写本を所有者から借り出すことに成功し、これを用いて新たな校訂作業を行った。Bühler が Codex Archetypus (原型写本) と呼んだこの写本は、Stein によって A

³ 以下、作品全体の伝承の型をバージョンと呼び、文面をテキストと呼ぶ。

⁴ Moorcroft 写本は校訂作業が終わった直後に所在不明となった。

⁵ カルカッタ校訂版に再現されている奥付から、Moorcroft 写本の転写元となった写本の所有者は Paṇḍit Śivarāma であることが知られていたが、Bühler が出会った写本の所有者 Paṇḍit Keśavarāma は Śivarāma の孫であった。

写本と名付けられた。A 写本の作成者は幾つかの章の奥付において Rājānaka Ratnakaṅṭha を名乗っており、同じ人物が作成した他の写本の年代から、A 写本の作成時期は 17 世紀頃であることが判明した。

A 写本には、Ratnakaṅṭha とは異なる複数の手蹟で訂正・挿入・注記などが書き込まれていた。これらの annotator (注釈者) は Stein によって A₁~A₅ と名付けられ、書き込みは A 写本の異読として扱われた。このうち、Stein が A₃ と名付けた annotator は、長い lacunae (欠損部分) の補填や詩節の追加などを行っており、A 写本では lacunae があること自体が認識されていない箇所⁶にも詩節や句を補填していた。したがって、A₃ は A 写本の転写元とは異なる写本を参照して書き込みを行ったと推測された。Stein はこれらの書き込みを適宜反映して校訂作業を行い、1892 年に公刊した⁷。

その後、A 写本はシュリーナガル在住の所有者に返却され、写しも作成されなかった模様である。したがって A 写本の原本は現在、閲覧可能な状態にないが、Stein 校訂版の註記によってかなり正確に再現することができる。

2.2 Stein が英訳に用いた L 写本 [Stein 1900: Vol.1, 50-53]

校訂版の公刊から 3 年後、Stein はラホールで一連の写本を購入した。その中に全章揃った『ラージャタランギー』の写本 (devanāgarī 文字) が含まれていた。この写本は購入地にちなんで L 写本と名付けられた。L 写本には、A₃ が A 写本に行った書き込みと一致する読みや、A 写本と全く同じ lacunae が数多くみられたうえ、Ratnakaṅṭha が自ら A 写本に書き込んだ欄外註 (8.2628) がそのまま転記されていた。このことは、L 写本が A 写本から転写されたことを示唆している。それにもかかわらず、Stein はこの写本を用いて、自らの校訂版に依然残っているテキストの劣化や lacunae の多くを修正・補填することができた。すなわち、L 写本は A 写本から派生したものではあるが、同時に、A 写本の転写元とも、A₃ が参照していた写本とも異なる源から得た追加的な情報を含んでいると思われた。

L 写本には質の低い筆写者が śāradā 文字から devanāgarī 文字に写したことを示す瑕疵がみられたため、Stein は、A 写本と L 写本の間には少なくとも一つの śāradā 文字の写本 (Stein はこれを入写本と仮称) が介在しており、L 写本の優れた読みは入写本の作成者に帰されると考えた⁸。

⁶ 例えば 3.310, 5.153, 7.125-126, 7.299, etc.

⁷ Stein 校訂版とほぼ同時に Durgāprasāda 校訂版が公刊された (1892 年: 第 1-7 章, 1894 年: 第 8 章)。公刊以前に Durgāprasāda が逝去したため、この校訂が何れの写本に基づいて行われたかは必ずしも明らかではない。P. Peterson は第 2 巻の序文において、Durgāprasāda は Peterson がマトゥラーで借り入れた devanāgarī 文字の写本を用いたと説明している [Durgāprasāda 1894: v]。この写本は現在、Bhandarkar Oriental Research Institute に保存されている。

⁸ L 写本には A₃ が A 写本に行った優れた書き込みの一部が反映されていない。例えば、A₃ が A 写本に挿入した詩節が L 写本には見られず (3.80-81, 99, 310)、A₃ が埋めた A 写本の lacunae の多くが L 写本では lacunae のまま放置されている (7.1395, 1637, 1661, 1673, 1676, 1688, 8.1157, 1286, 1350, 1366, 1550)。この

Stein は、L 写本を参照して自らの校訂に修正を加え（ただし修正後の校訂版は公刊されていない）、これを英訳して 1900 年に公刊した。

Stein がその後 L 写本をどのように処置したかは不明である。このため、L 写本については Stein 英訳の序文と脚注から一部を窺い知ることができるのみである。

2.3 Hultzsch が入手した M 写本 [Hultzsch 1911, 1913, 1915]

これに先立って、E. Hultzsch が 1885 年にシュリーナガルで『ラージャタランギー』の断片的な写本 (śaradā 文字) を入手した。これは、第 7 章と第 8 章のみから成る損傷の甚だしい写本であった⁹。Hultzsch は四半世紀後にこの写本を分析し、L 写本と共通の読みが多いことに気付いて M 写本と名付けた。

Hultzsch は、第 7 章と第 8 章に未だ残る疑問点を解消するため、3 つの校訂版（カルカッタ校訂版、Stein 校訂版、Durgāprasāda 校訂版）、A 写本、L 写本、M 写本等の読みを比較検討した。結果は 1911 年から 1915 年の間に 3 回に分けて公表されたが、この作業の過程で予期しなかったことが明らかになった。M 写本の第 8 章では、A 写本の第 1230–1236 詩節に相当する部分に、全く異なる 161 詩節が置かれていた。Hultzsch は、この 161 詩節によって前後の時間的空白が埋まることに注目し¹⁰、A 写本の 7 詩節は暫定的に書かれたものであり、後に新しく入手した情報に基づいて 161 詩節に置き換えられたと判断した。Hultzsch の考え方は、この書き換えを行ったのが Kalhaṇa 自身であることを無条件の前提としていた。

Hultzsch が公表した M 写本の分析結果は学界の注目を集めるに至らず、健在だった Stein を含め、研究者が当時これに反応した形跡はない¹¹。

M 写本は現在、ベルリン州立図書館に保存されている。

3 第 8 章の二つの異なるテキスト

上述のとおり、M 写本の出現によって、『ラージャタランギー』の第 8 章には二つの異なるテキストが存在することが判明した。Hultzsch は両テキストの内容に十分な注意を払わなかったが、A 写本の 7 詩節と M 写本の 161 詩節には全く相反することが書かれている。このことは、テキストの成立過程について重要な示唆を与えているばかりでなく、第 7 章・第 8 章を巡る前述の議論にも影響を及ぼす可能性がある。したがって、以後

ため Stein は、A 写本から入写本への転写は A₃ が全ての書き込みを終える前に行われたと推論した。

⁹ M 写本に保存されている詩節は以下のとおり（詩節番号は A 写本の同一詩節のもの）。

第 7 章（A 写本では全 1,732 詩節）：553–1066, 1105–1689, 1727–1732。

第 8 章（A 写本では全 3,449 詩節）：1–24, 733–1369, 1495–1695, 1736–1796, 1839–2046。

¹⁰ 8.1154 には Laukika 暦 4199 年（西暦 1123/24 年）についての言及があり、8.1348 には Laukika 暦 4223 年（西暦 1128 年）の出来事が語られているが、この間の激動期についての記述は少なく、暦年も示されていない。これに対し、M 写本の 161 詩節の中にはこの間の暦年を明示する詩節がある。

¹¹ Hultzsch はこの作業に先立って、同じ刊行物 (Indian Antiquary) に『ラージャタランギー』の梗概を寄稿しており、Stein [1900: Vol.1, xii–xiii] は英訳の序文においてこれに言及している。したがって、Stein が M 写本の 161 詩節に関する Hultzsch の発表に気付かなかったとは思われない。

の論述の前提として、二つのテキストの違いをここで明らかにしておく。

第 8 章で語られているのは、カシミールが第二ローハラ王朝の支配下にあった 12 世紀前半の出来事である。テキストの異同が見られる箇所では、Sussala 王の治世下、*dāmara* (武装した大地主) の徒党が前王朝最後の王 *Harṣa* の孫である *Bhikṣācara* を押し立てて謀反を起こしている。Sussala はひとたび *Bhikṣācara* に奪われた王位を奪還するものの、寵妃の死に意気阻喪し、退位を考えて息子 *Jayasimha* (『ラージャタランギー』執筆当時の王) をローハラの砦から呼び寄せる。

(1) A 写本の 7 詩節

A 写本の 7 詩節では、この時に Sussala から *Jayasimha* に王位が譲られる。この譲位は何故か名目的なものにとどまり、王国の統治は引き続き Sussala が行う。しかし、*Jayasimha* の即位に伴って国内にあらゆる目出度いことが起こる。

śrāntāḥ pitṛpitrvyās te na yāṃ voḍhum aśaknuvan /

dhuram udvaha tāṃ vīra tvayi bhāro 'yam arpiṭaḥ // A 写本 8.1233 //

(Sussala の言葉)「雄々しき者よ、お前の父も伯父達も疲れて担うことのできなかったこの重責を引き受けよ。この重荷はお前に相応しい。」

sāmrājyaparakriyāmātrapātraṃ putraṃ nrpo vyadhāt /

na tv ārpipad adhikāraṃ tasmin daivavimohitaḥ // A 写本 8.1234 //

運命により迷妄に陥っていた王は、息子に君主の地位を与えたのみで、統治権は彼に委ねなかった。

abhiṣekavidhāv eva rājasūnoḥ śamaṃ yayuḥ /

puroparodhāvagrāhavyādhicaurādyupadravāḥ // A 写本 8.1235 //

王子の灌頂式が行われるや否や、首都の包囲、旱、病気、盗賊などの災厄が治まった。

(2) M 写本の 161 詩節

これに対し、M 写本の 161 詩節 (M8.1230–1390) では、*Jayasimha* は Sussala に合流して戦闘に参加する。一進一退の攻防が続く中、父子の間に不和が生じる。Sussala は、息子の浪費癖などは取り巻き連に起因すると考え、*Jayasimha* の側近を投獄し、顧問官を国外追放に処する。一方、*Jayasimha* は父王の専横により国内が惨状に陥っていることを嘆き、国外に向かいつつあった顧問官 *Dhanya* を呼び返す。*Jayasimha* は *Dhanya* を通じて *Bhikṣācara* と *dāmara* の離間を図ったうえ、*dāmara* の首領 *Koṣṭheśvara* と密約を結ぶ。

karṇejapapreraṇayā viparyastamabhir nrpaḥ /

tataḥ putraṃ prati mṛṣā roṣakāluṣyam agrahīt // M8.1343 //

知恵の顛倒した (* *viparyastamati* [Hutzsch 1915: 150, n.1]) 王は、内緒話を人の耳に吹き込む者達に唆され、息子に対して不当に怒りの悪心を抱いた。

arujaḍ dāmaravyūhaṃ bibhitsuḥ sa tadājñayā /

koṣṭheśvaraṇa jñāteyād ādrto bhikṣupakṣyatām // M8.1350 //

Koṣṭheśvara に姻戚として敬われていた彼 (Dhanya) は、彼 (Jayasiṃha) の命令により、Bhikṣu (Bhikṣācara) に味方する者達の離反を画策し、dāmara の軍隊を分裂させた。

udayaḥ prayayau gaṅgāṃ dhanyenā prerito vyadhāt /

gūḍhaṃ koṣṭheśvaras sandhi samaṃ siṃhamahībhuajā // M8.1351 //

Udaya (国外に追放された顧問官の一人) はガンガーに去った。Koṣṭheśvara は Dhanya に (*dhanyena [Hultzs 1915: 150, n.9]) 促され、Jayasiṃha 王と密約を (*sandhiṃ [Hultzs 1915: 150, n.10]) 結んだ。

このように、A 写本の 7 詩節では良好であった父子の関係は、M 写本の 161 詩節では甚だしく悪化している。dāmara と Bhikṣācara を離間させ、自らが dāmara と密約を結んだということは、事実上、父王に対する反逆である。しかも、Koṣṭheśvara は後に Jayasiṃha 王に対して謀反を起こし、獄死することになる人物である。明らかに、M 写本に書かれていることは後年の Jayasiṃha にとって不都合な逸話である。すなわち、二つのテキストが存する背景には政治的要因が働いている可能性がある。

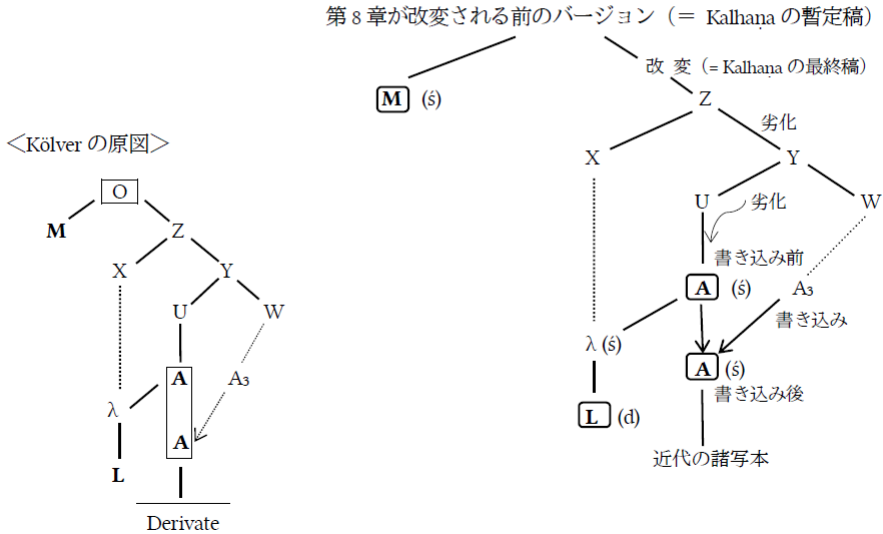
4 Kölver の写本系統図 [Kölver 1971: 55–61]

1971 年に B. Kölver が『ラージャタランギー』の文献考証を行った。これは、M 写本の存在を前提として行われた『ラージャタランギー』研究の嚆矢となった¹²。Kölver は先行研究の考え方を修正し、以下のような写本系統図を作成した。

¹² 1960 年代に Vishva Bandhu が『ラージャタランギー』の校訂 (Durgāprasāda 校訂版をベースとし、21 写本を比較検討) を行ったが、何故か M 写本は参照していない [Vishva Bandhu 1963, 1965].

図 1 Kölver の写本系統図

- 左に示した Kölver の原因に筆者が説明を付加.
- □ = 存在が確認されている写本.
- (ś) = śaradā 文字, (d) = devanāgarī 文字.
- 実線は転写, 破線は参照. 線上に他の写本が介在する可能性を前提とする.



この系統図は以下の考え方に基づいて作成されている。

(1) M 写本に保存されているのは先に成立したバージョンである

Kölver は Hultzscht と同様、第 8 章を改変したのが Kalhana 自身であることを無条件の前提とした。ただし、Hultzscht とは逆に、改変前のテキストを伝えているのは M 写本であり、A 写本および L 写本の第 8 章は改変後のテキストであると考えた。

前述のとおり、M 写本では Jayasiṃha が Sussala に対して事実上の謀反を企てるのに対し、A 写本では Sussala から Jayasiṃha へと平和的に王位が譲られる。しかし、何れの写本でも、この直後に Jayasiṃha は謀反の疑いを掛けられて Sussala により幽閉される。A 写本の 7 詩節の後ではこの展開が些か唐突であるのに対し、M 写本の 161 詩節の後では話の筋が通っている。このため Kölver は、先に成立したのは M 写本のテキストであり、後に時の王 Jayasiṃha に対する配慮から詩節の入れ替えが行われたと判断した。

そのうえで Kölver は、テキストの伝承には、改変前のバージョンがそのまま伝えられて M 写本に至った系統と、改変後のバージョンが伝えられて A 写本・L 写本に至った系統があり、両系統の間には何の連絡もないと考えた。

(2) 改変後の系統に属する諸写本の関係

Stein は、λ 写本の作成者が参照していた写本（写本系統図では X 写本）と A₃ が参照し

ていた写本（同、W 写本）の関係については何も見解を述べていない。これに対し Kölver は、(1) の考え方に従い、M 写本以外は全て A 写本と同じ系統に属するという前提に立って諸写本の間を推論した。

L 写本に基づいて Stein 校訂に数多くの修正が加えられたということは、X 写本に発生していない劣化が A 写本と W 写本に発生していたことを意味する。また、A₃ によって A 写本に適切な修正が加えられているということは、W 写本に発生していない劣化が A 写本に発生していたことを意味する。このことを説明するため、Kölver は、まず Z 写本から Y 写本に至る過程で劣化が生じ、Y 写本から A 写本に至る過程で更に劣化が生じたと考えた。

Kölver の考え方によれば、A 写本は最も劣化の進んだ写本から転写されており、L 写本の転写元である λ 写本は最も劣化の度合いの低い写本を参照して A 写本を修正したことになる¹³。

(3) 未解決の問題

しかし Kölver [1971: 59] は、「λ 写本の作成者は劣化の度合いが最も低い写本を参照していたにもかかわらず、なぜ A 写本の lacunae をもっと徹底的に埋めることができなかったのか」という疑問が残ることを認めている。これは、第 8 章の随所に大きな lacunae が放置されていることを指している¹⁴。

5 Kölver の写本系統図に対する疑問

Kölver が不可解であると言ったとおり、λ 写本の作成者も A₃ も、それぞれが参照していた写本によって全 8 章を満遍なく修正しているとは言えない。等閑に付されているのは第 8 章である。3,449 詩節からなる第 8 章のうち、Stein 英訳の脚注により L 写本の異読が確認される詩節、および A 写本への A₃ の書き込みがみられる詩節はそれぞれ 20 詩節程度に過ぎず、同章には大きな lacunae が随所に放置されている。Kölver [1971: 60] は、このことを説明するため、『ラージャタランギー』の終わりの部分の劣化はかなり早い段階で生じていたのであろうと推測している¹⁵。

しかし、Kölver の写本系統図には、Kölver 自身が抱いた疑問の他にも幾つかの問題点

¹³ Stein は、A 写本から λ 写本への転写は A₃ が全ての書き込みを終える前に行われたと推測したが（脚注 8 参照）、Kölver はこの説を否定している。Kölver によれば、L 写本に A₃ の書き込みと一致する優れた読みがあるのは、両写本が同じ源（Z 写本）から生じ、双方とも Y 写本から A 写本に至る過程で発生した劣化を被っていないためであって、A₃ の書き込みを写したからではない。したがって Kölver は、A 写本から λ 写本への転写は A₃ が書き込みを行う以前に行われたと考えた。

¹⁴ Kölver 自身は第 7 章と第 8 章を一体として論じているが、Stein 校訂版の第 7 章に残る lacunae は 6 か所に過ぎず、L 写本ではこのうち 3 か所が埋まっている。

¹⁵ Stein [1900: Vol.1, 48] は、『ラージャタランギー』の終わりの部分にテキストの劣化が目立つことについて、「この王統紀の後ろの方（concluding portion）に対する人々の関心は薄く、さほど頻繁には転写されなかったため、写本を作成する際に比較の対象が少なかったのも一因であろう」と述べている。

がある。

まず、入写本の作成者と A₃ が参照していた写本 (X 写本, W 写本) は A 写本より劣化の度合いが低かったにもかかわらず、それらの写本ではなく A 写本がカシミールにおいて Codex Archetypus となったのは何故か、という点である。この疑問は Kölver 自身が抱いた上記の疑問と相通ずる。すなわち、X 写本と W 写本の第 8 章が 17 世紀の写本作成者に顧みられなかった理由と、両者本が Codex Archetypus とならなかった理由は共通している可能性がある。

また、A 写本の系統はその他の写本との間に何の連絡もないという考え方は根拠に乏しい。Kölver の考え方の前提には、第 8 章のテキストの改変が Kalhaṇa 自身によって Jayasimha 王の治世下で行われたという先入観があると思われる。A 写本の第 8 章末の記述によれば、Kalhaṇa は Jayasimha 王が未だ王位にあった 1149/50 年に同章 (すなわち改変後のテキスト) を書き終えたことになっている (脚注 1 参照)。Kölver はこの記述が真実であることを前提として、Kalhaṇa は暫定稿の第 8 章から 161 詩節を削除した後に『ラージャタランギー』を脱稿したのであり、暫定稿の内容が広く世に知られることはなかった、と考えていたと推察される。しかし、この考え方が正しいとすれば、161 詩節を含むバージョンは没になった原稿であり、写本が作成されて流布する可能性は極めて低かったと言わざるを得ない。そもそも、テキストの改変を行ったのが Kalhaṇa 自身であると断定し得る根拠はない。

6 複数のバージョンが共存していた可能性

以下では、上記の疑問を出発点として、A 写本と M 写本の成立過程について Kölver の考え方とは異なる可能性を提起してみたい。

6.1 A 写本の 7 詩節と M 写本の 161 詩節

第 8 章の成立過程に関する Hultzsich と Kölver の考え方は根本においてさほど違わない。Hultzsich は A 写本のテキストが先行し、後に改変されて M 写本のテキストになったと考え、Kölver はその逆であると考えたが、この改変を行ったのが Kalhaṇa 自身であり、最初に成立したテキストは暫定稿に過ぎなかったと考えている点で、両学者の考え方は一致している。しかし、前述のとおり、これが真実であったとすれば暫定稿の写本が今日に伝えられた可能性は低い。

Kölver は、M 写本の 161 詩節において父子の間に不和が生じることによって、少し後の詩節で Sussala が Jayasimha を幽閉する理由が明らかになるため、この 161 詩節は本来そこにあったものであり、政治的配慮から後に削除されたのであろうと推察した。したがって Kölver [1971: 83] は、Kalhaṇa の最終稿を伝えているのは A 写本であり、M 写本の異読を採用する際は、その違いが Kalhaṇa の意図的改変でないことを確認しなければならないと言っている。161 詩節が削除された理由はおそらく Kölver が推察したとおりである

うが、M 写本の第 8 章が改変前のテキストであるかどうかには大いに疑問がある。

A 写本に不可解な点があるのと同様、M 写本にも不可解な点がある。両写本の間に異同がみられる箇所から約 100 詩節を経て、Sussala は殺害され、Jayasiṃha が王権を行使することになるが、M 写本にはこの時に灌頂式が行われたことを伝える記述がない。このため Kölver [1971: 82] は、詩節の入れ替えは灌頂式の場面を挿入するためでもあったと考えている。

しかし、不可解な点はこれにとどまらない。M 写本の 161 詩節の冒頭部分で、Jayasiṃha は「新王 (navakṣmābhrt)」と呼ばれている¹⁶。Hultzsch [1915: 154] はこれを der jünge Fürst (若き君主) と独訳して王という言葉を避けているが、原語は飽くまでも王(「大地を支える者」)である。この後には「Jayasiṃha 王」「Siṃha 王」という呼称も見られる¹⁷。また、前述(24 頁)のとおり Jayasiṃha には顧問官 (mantrin) があった。これらのことは、161 詩節の前に、Sussala から Jayasiṃha に王位が譲られる場面が本来はあった可能性を示唆している。ただし、それが A 写本の 7 詩節であったのかどうかは不明であり、その部分が削除された理由も不明である¹⁸。

この可能性を前提とすると、Sussala から Jayasiṃha への譲位と、父子の関係悪化の双方について語るテキストがまず存在し、A 写本のテキストと M 写本のテキストはそれぞれ別の箇所を削除することによって成立したと考えることができる。このことは、ある時期に『ラージャタランギー』には少なくとも 3 つのバージョンが共存していたことを意味する。

6.2 第二ローハラ王朝の vaṃśāvali として改変された A 写本の第 8 章

Kölver は、Kalhana が政治的配慮により 161 詩節を削除し、7 詩節に置き換えたと推測した。しかし、この 161 詩節に相当する部分を含むバージョンが既に世に出ていたとすれば、政治的な脅威によって改変を余儀なくされたという見方には再考の余地がある。では、この改変はどのような意図をもって行われたのだろうか。

M 写本の 161 詩節のうち、Jayasiṃha の謀反未遂に関する記述は僅か 15 詩節に過ぎず、その他の部分では、内戦の経過や王の腹心の死などが語られており、Kölver [1971: 82] も何故それら全てを削除する必要があったのかを怪しんでいる。そこで、この 161 詩節で何

¹⁶ saṃprāpte kṣiptikāṃ tasmin navakṣmābhrt purāntare /
saṃrebhe prabhuvīryavidhvanatpradhanadundubhiḥ // M8.1235 //
彼(ダーマラの頭目 Prthvīhara)が Kṣiptikā に到達すると、首都では、主の武勇を鼓舞するために (*prabhuvīryarddhi* [Hultzsch 1915: 139, n.7]) 鳴り響く戦さの太鼓に新王が奮い立った。

¹⁷ M8.1242, M8.1351 (前掲 24 頁)。Hultzsch [1915: 155, 163] はこれらを Prinz Jayasiṃha/Siṃha と独訳している。

¹⁸ A 写本の 7 詩節で語られている譲位が名目的なものであったことは同写本でも認識されており、第 8 章第 3404 詩節(脚注 1 参照)では、西暦 1149/50 年時点で Jayasiṃha は 22 年間王位にあるとされ、父親の Sussala 王が殺害された年 (Jayasiṃha の灌頂の 5 年後) を在位の起点としている。したがって、M 写本のテキストはこの灌頂の正統性を認めていなかったとも考え得る。

がどのように語られているかを見てみたい。

まず、出だしの部分では、*ḍāmara* の首領 *Prthvīhara* の戦死の様相が臨場感溢れる筆致で描かれている (M8.1230–1246)。この部分において筆者の視点が *Prthvīhara* の側にあることは、王軍を「敵軍」と呼んでいることによって明らかである¹⁹。*Prthvīhara* の戦死から約 80 詩節を隔て、国民が *Sussala* の苛斂誅求に苦しみ、息をひそめて暮らしていた様子が描かれている²⁰ (M8.1329–1333)。*Jayasimha* が謀反を企てた話はこの直後に出てくる (M8.1343–1357)。最後の部分では、腹心を失って気落ちした *Sussala* が *ḍāmara* 軍に苦戦し、王軍は壊滅する (M8.1358–1390)。この部分には、*Sussala* が怖気づいて密かに戦場を逃げ出す場面も含まれている²¹。

このように、161 詩節の中で語られていることは、ひとり *Jayasimha* にとって不都合であるにとどまらず、第二ローハラ王朝として後世に残したい話ではなかったと思われる。すなわち、A 写本の第 8 章では、既存のテキストから第二ローハラ王朝の年代記 (*vaṃśāvali*) として望ましくない部分を取り除くなどの修正が行われたと考え得る。

6.3 17 世紀の写本作成者が復元しようとしていた原作

第 8 章の内容を異にする複数のバージョンが 17 世紀に依然共存していたとすれば、*λ* 写本の作成者や A 写本の annotator *A*₃ が第 7 章までの修正に注力し、第 8 章に殆んど手を加えていない理由はある程度説明される。両者が参照していた写本の第 8 章が A 写本の第 8 章と異なるテキストであったとすれば、それを用いて A 写本の第 8 章を修正することはできないからである。

しかし、そうであったとしても、A 写本の第 8 章を改善する方法が全くなかったとは思われない。M 写本の第 8 章を見ても、A 写本の同章を修正するために用いることができたと思われる箇所は少なからずある²²。それにもかかわらず、*λ* 写本の作成者も *A*₃ も第

¹⁹ *svasainyāngre lavanyasya vallabho `ribalāt tataḥ / vidrutāc chūlam aśvāyāḥ kṣiptam ekena śāstriṇā // M8.1236 //*
自軍の先頭を駆けていた (**valgato* [Hultzschn 1915: 139, n.9]) *lavanya* の (**lavanyasya* [Hultzschn 1915: 139, n.8], *lavanya* は多くの場合 *ḍāmara* と同義、ここでは *Prthvīhara* を指す) 雌馬に (**aśvāyāḥ* [Hultzschn 1915: 139, n.10]), 逃走する敵軍から一人の兵士によって槍が投げられた。

²⁰ *tatpure tadbhayā tūryaṃ śāvānāṃ nāpy avācyata / vivāhādyutsavād yāto vācyaghoṣasya kā kathā // M8.1332 //*
彼 (*Sussala*) の都では、彼を恐れて (**tadbhiyā* [Hultzschn 1915: 148, n.9]) 葬儀の笛さえ吹かれなかった (**avādyata* [Hultzschn 1915: 148, n.10])。まして、婚礼をはじめとする祝い事に樂の音を鳴らす (**vādyaghoṣasya* [Hultzschn 1915: 148, n.11]) ことなど論外だった。

²¹ *nijair alakṣite lokapunyaṃ tasmin bhayād gate / nāsti rājeti matvāgāt kaṭako vijayeśvaraṃ // M8.1385 //*
彼 (*Sussala*) が恐れて味方に見られずに *Lokapunya* に去ると、(王の) 軍隊は「王は (もうこの世に) いない」と考えて *Vijayeśvara* 寺院に赴いた。

²² 例えば、M 写本では A 写本の 8.756 に相当する詩節の後に A 写本にはない詩節 (M8.756^{bis}) があり、8.756 と共に *yugmam* (1 文を構成する 2 詩節) を形成している。Stein 校訂版の脚注によれば、*Ratnakaṇṭha* は 8.756 の詩節番号に *yugmam* を意味する 2 の数字を付記しているが、8.756 と共に *yugmam* を形成する詩節は見当たらない。

8章を改善する努力を放棄しているかの印象を受ける。このように第8章に対する関心が薄いのは、同章に Kalhaṇa の原作を求めることは無意味であるという認識が当時の人々の間にあったことを示唆しているように思われる。少なくとも、λ写本の作成者と A₃ が古い写本を用いて復元しようとしたのは、第1章から第7章のみである（脚注15参照）。

6.4 諸写本の関係に関する推論

このように、ある時期、第8章の内容を異にする複数のバージョンが共存し、M写本もそのひとつであった可能性を前提とすると、Kölverの写本系統図は根本から見直す必要がある。以下では、既存の僅かな情報に基づいて諸写本の間を推論してみたい。

(1) M写本とA写本

前述のとおり、M写本とA写本はそれぞれ第8章に不可解な点があり、M写本のテキストからは Jayasimha の灌頂の場面（A写本の7詩節に相当する箇所）が、またA写本のテキストからは Sussala と Jayasimha の不和を含む数年間の出来事（M写本の161詩節に相当する箇所）が削除されているように見受けられる。

この削除がそれぞれいつ行われたのかは不明である。しかし、Kalhaṇa 以後、カシミールにおける王統紀の伝統は一時途絶え、15世紀に Jonarāja がスルタン Zayn al-‘Ābidīn の命を受けて Kalhaṇa の後を書き継ぐまで、約300年間にわたる空白期間があった。Jonarāja はイスラム化以前の諸王（Jayasimha 以降の第二ローハラ王朝の諸王）についてごく簡単に記述しているにとどまり、この間の記録が乏しかったことを窺わせている [Kaul 1967: 43]。このことから、両テキストが成立したのは、第8章が幕を閉じる1149/50年にごく近い時期であったと推察される。

少なくとも双方のテキストが成立するまで、父から子への譲位を語る部分と、父子の不和などを語る部分の双方を備えた先行テキストが存在していたと思われる。しかし、そのテキストもまた、第8章の原形であったとは断定し難い。

M写本のバージョンとA写本のバージョンのいずれがより古いかは不明である。ただし、λ写本の作成者や A₃ がA写本の第7章に加えた説得的な修正は、M写本の該当箇所の読みと80%前後の確率で一致している。したがって、写本自体はM写本の方がA写本より古いとみられる。

(2) λ写本の作成者とA写本の annotator A₃ が参照した写本

amareṣe dvārapatiḥ sārđhaṃ tasthau nṛpātmañaiḥ /
rājānavāṭīkopānte rājasthānīyamantriṇaḥ // A·M8.756 //
vihāravāṭīke tuṅgeśāpaṇe kampaṇāpatiḥ /
anye 'pi nandanavane sasainyā rājamantriṇaḥ // M8.756^{bis} //

国境警備長官は王子達と共にアマレーシャ寺院に、司法長官などの顧問官達はラージャナヴァーティカの近郊に、総司令官は寺院近傍のトゥンゲーシャ市場に、王のその他の顧問官達は兵士達と共にナンダナの森にとどまった。

λ 写本の作成者と A₃ が参照していた写本（以下では、Kölver の写本系統図に倣ってそれぞれ X 写本、W 写本という）は、いずれも第 8 章の修正には用いられていないため、A 写本の系統に属する写本ではなかったと思われる。一方、上述のとおり、両者が第 7 章において行った修正は、M 写本の該当箇所と 80 %前後の確率で一致する。したがって、X 写本と W 写本は M 写本に近い系統に属する可能性がある。ただし、M 写本との一致は、両写本が M 写本と同様に古い写本であったことを意味しているに過ぎないかもしれない。

なお、L 写本と A 写本には一つの注目すべき相違点がある。L 写本の第 7 章第 1149 詩節の後には、A 写本や同写本から派生した他の写本には存在しない詩節がみられる。Stein はこの詩節を真作と認め、第 1149^{bis} 詩節として英訳に反映している。第 1149 詩節において Kalhaṇa は、第一ローハラ王朝最後の王 Harṣa が豚肉を常食していたことを非難し、続く第 1149^{bis} 詩節では、Harṣa 王のこの行いによってカシミールの王全体が汚されたと言っている。A 写本のテキストから第 1149^{bis} 詩節が削除されたのは、Harṣa 王の醜行のため第二ローハラ王朝の王達までが汚されたと言うに等しい記述が問題視されたためであろう。

sa turuṣkaśatādhīśān anīśaṃ poṣayan dhanaiḥ /
nidhanāvadhi durbuddhir bubhujе grāmyasūkarān // A·L7.1149 //

彼は常にイスラム教徒の百人隊長に財産を与えて養っていたにもかかわらず、愚かにも終生豚肉を食した。

ittham ācaratānartham pārthivānām ihādhikam /
pañktiḥ sandūṣitā tena tiraśceva vipaścitām // L7.1149^{bis} //

彼がこのような不適切なことを行っていたため、動物により賢者が恥辱を被るように、広く当地の王たる者全体が恥辱を被った。

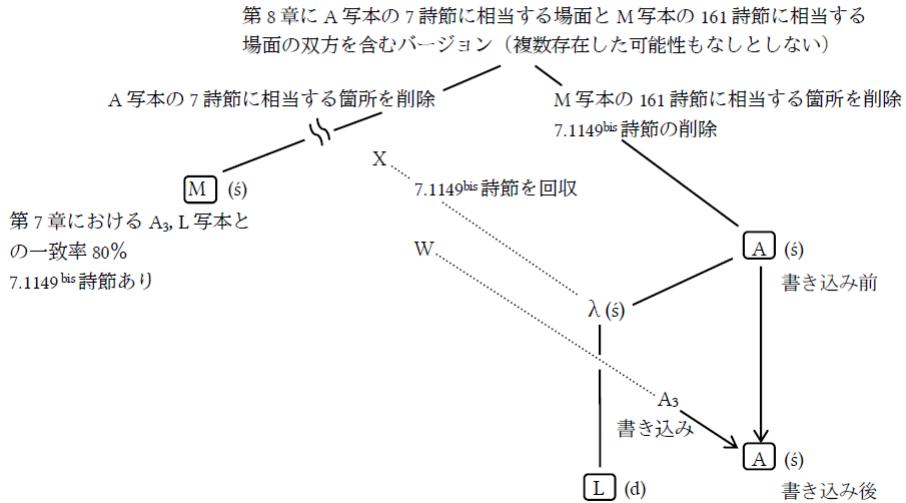
一方、M 写本には第 1149^{bis} 詩節に相当する詩節が存する。したがって、λ 写本の作成者が参照していた X 写本は M 写本に近い系統に属していた可能性が一層高まる。これに対し、A₃ は W 写本から第 1149^{bis} 詩節を回収していないため、W 写本は X 写本とは別の系統に属していたと思われる。ただし、A₃ はこの詩節が削除された趣旨を尊重して意図的にこれを回収しなかった可能性もある。

λ 写本の作成者は、X 写本を参照しつつ、A₃ が W 写本を用いて修正した A 写本に更に修正を加えている。したがって、X 写本は W 写本より古い写本であったと推察される。

(1) と (2) で述べたことを前提として諸写本の関係を図示すれば、以下のとおりである。

図2 諸写本の関係

— 凡例は図1と同様.



7 諸写本の関係に関する推論から読み取れること

次に、諸写本の関係に関する以上の推論から、『ラージャタランギニー』の最終章を巡る議論に対してどのような示唆が得られるかを考えてみたい。

7.1 M 写本と A 写本の第 8 章は何れも改変されている

M 写本と A 写本の第 8 章は、双方とも何れかのテキストを改変したものであり、Kalhaṇa の手になる第 8 章が存在したとしても、それを忠実に反映していない。

M 写本の第 8 章は半ば過ぎから散逸しており、失われた詩節数も内容も不明であるが、A 写本では、M 写本が途切れたあたりから Jayasiṃha 王に対する迎合の度合いが強くなり、王族貴顕による宗教施設の寄進を長々と紹介するなど、第二ローハラ王朝の vaṃśāvali としての色彩が濃くなる²³。複数あったバージョンのうち、A 写本系統が優勢になり、後に A 写本が Codex Archetypus となったのは、これが第二ローハラ王朝下で政治的に最も無難な内容だったからであると思われる。その他のバージョンは正統とみなされないようになり、転写される頻度も低く、やがて失われたと推察される。M 写本は同様の運命を免れた稀有な例であったということになる。

²³ A 写本の第 8 章に文章上の難点が多々あることは Stein [1900: Vol. 1, 43–44] も認めているが、難点は主として半ば過ぎ以降の詩節に見られる。例えば、同じ比喩が二度目に用いられている 5 例は全て終わりの 800 詩節に含まれる。このことは、前半と後半の書き手が異なることを示唆している。

7.2 第 8 章を改変したのは Kalhaṇa ではない

M 写本, A 写本の何れにおいても, 詩節の削除によって生じた不整合が放置されている。M 写本において, 譲位の場面が削除された後も Jayasiṃha が「新王」「Jayasiṃha 王」と呼ばれていることは前述のとおりである。一方, A 写本では, Prthvihara の戦死の場面が削除された結果, 謀反の首謀者が何の説明もないまま姿を消している²⁴。このように, 第 8 章の改変には弥縫的措置の感があり, 原作者にこれを帰することができるかどうかは疑問である。

とりわけ, A 写本のテキストは宮廷詩人もしくはそれに準ずる立場の人物により改変されている可能性が高い。しかし, Kalhaṇa が宮廷詩人として用いられた形跡はない²⁵。Kalhaṇa は序文において, 史実を語る際は中立的でなければならぬと述べているが²⁶, 第 8 章後半の執筆態度はこの信念と全く相容れない。

Hultsch も Kölver も, Kalhaṇa 自身がテキストを改変したと考えている。しかし, 仮に改変前のテキストが Kalhaṇa の作であったとしても, これらの点に鑑みれば, この改変を行なったのが Kalhaṇa であることは想定し難い。

7.3 改変前のバージョンは Jayasiṃha 王の没後に公にされた

A 写本の第 8 章が改変されているとすれば, 同章を書き終えつつある時点が 1149/50 年であることを示唆する同章末の詩節(脚注 1 参照)も疑って見なければならぬ。

A 写本と M 写本の第 8 章は, 共通の型のテキストを改変したものであり, 改変前のテキストには M 写本の 161 詩節に相当する叙述があったと思われる。しかし, この叙述は『ラージャタランギニー』執筆当時の王 Jayasiṃha にとって不都合な逸話を含むため, 同王の存命中に公にされたかどうかは疑問である。したがって, 改変前の第 8 章を伴うバージョンがあったとすれば, それは Jayasiṃha 王が死去した 1155 年以降に公にされたとみるのが妥当であろう²⁷。第 8 章の改変はこれより更に後のことになる。

²⁴ A 写本の 8.1449 では, Bhikṣācara が「Prthvihara が生きていたなら」と述べ, 既に Prthvihara が死去していることを示唆している。Stein [1900: Vol.1, 114, n.1149-50] は, 「このような重大なことが直接説明されていないのは著者の失念かテキストの損傷のためであろう」と英訳に注記している。

²⁵ Kalhaṇa の父親は第一ローハラ王朝最後の王 Harṣa の重臣であったが, Harṣa は Sussala 系傍系の王子達に殺害されて王朝は交代する。第二ローハラ王朝下で生きた Kalhaṇa は政治的に難しい立場にあったと推察される。

²⁶ ślāghyaḥ sa eva guṇavān rāgadveṣabahīkṛtā /
bhūtārthakathane yasya stheyasyeva sarasvatī // 1.7 //
仲裁者のように愛憎を離れた言葉で過去の出来事を語る人こそ, 有徳な人として称賛すべきである。

²⁷ Jonarāja によれば, Jayasiṃha はラウキカ暦 4230 年(西暦 1154/55 年)フェールグナ月の黒半月第 12 日に死去した(Jonarāja の Rājatarāṅgīnī, 第 38 詩節)。

7.4 Kalhaṇa は 1149/50 年に何を書き終えたのか？

変更前の第 8 章のテキストが Kalhaṇa の真作であった可能性は否定できない。しかし、1149/50 年に Kalhaṇa が何らかの作品を書き終えて世に問うたとすれば、それは時の王朝にとって不都合な点がない作品だったと思われる。そのためには、我々の全く知らない第 8 章が存在したか、あるいは第 8 章がそもそも存在しなかったことを想定しなければならない。Kalhaṇa が信念を捨てて現王朝の意に沿った第 8 章を書いたかどうかは議論の分かれるところであろう。一方、第 8 章はそもそも存在せず、第 7 章が最終章であったとすれば、政治的な問題は全くない。また、Harṣa 王の悲劇的な死をもって幕を閉じることになるため、Kalhaṇa が序文に述べている作品の趣旨（脚注 2 参照）との整合性は高い。

他方、1149/50 年は Kalhaṇa の擱筆年ではなく没年であったとみることもできる。その場合、Kalhaṇa が残した未定稿に未完成の第 8 章があったと考えても不自然ではない²⁸。その未定稿に何れかの人物が手を入れ、完成した作品としての体裁を整えたとすれば²⁹、第 8 章の終わりの部分に Kalhaṇa らしからぬ文章上の難点が多々見られることも説明できる³⁰。しかし、未完成の原稿に序文があり得たかどうかについては議論の余地がある。第 1 章冒頭の序文が Kalhaṇa 自身の手で書かれたことは、参照した資料や先行作品について詳しい説明が行われていることなどから疑う余地がない。しかも、この意気軒高な序文には、既に完成した作品に対する満足感とも言うべきものが感じられる。中立的な立場から史実を語る者こそ称賛されるべきである（脚注 26 参照）という言葉は、あたかも自賛のように響く。聴き手は必ずや寂静の境地に誘われるであろう（脚注 2 参照）という言葉には、作品の出来栄えに対する自信が窺われる。未完成の原稿にこの序文があったかどうかは疑問である。

おわりに

Bühler が発見し、Stein が校訂・英訳した A 写本は、19 世紀当時の学者が入手し得た最も古い写本であった。以来、A 写本は Kalhaṇa の原作をほぼ忠実に保存していると信じられてきた。後に M 写本が解読され、第 8 章に異なるテキストが存在することが判明したが、学者は何れのテキストも Kalhaṇa 自身が書いたものであり、一方が暫定稿、他方が最終稿であると考えた。この結果、さほどの議論も行われないうまま、A 写本のテキストが最

²⁸ 2019 年 9 月に開催された日本印度学仏教学会第 70 回学術大会において、東京外国語大学の小倉智史氏（アジア・アフリカ言語文化研究所・助教）より、「王朝の年代記は、ある王の治世中に執筆者が死ぬことが多いため、往々にして中途半端な終わり方をするものである」とのご指摘を頂いた。

²⁹ 因みに、Jonarāja は Jayasimha 王の治世の末期から筆を起こして約 300 年の空白を埋めたが、時のスルタン Zayn al-Ābidin の治世半ばまでを記述したところで急死した。Jonarāja の使命は弟子の Śrivarā によって引き継がれた。

³⁰ Stein [1900: Vol.1, 44] は、『ラージャタランギー』の終わりの部分の完成度が低いのは Kalhaṇa が推敲を終えていないからであると主張し、「第 8 章のこの部分は死後に発見された乱筆の未定稿から写されたということもあり得る」と言っている。

終稿であるとの見方が広く受け容れられてきた。しかし、M写本のテキストを改めてよく読んでみると、この写本にもまた改変の跡らしきものがみられ、複数の異なるバージョンが共存していた可能性が浮かび上がってくる。

改変前のテキストは、『ラージャタランギニー』執筆当時の王の治世下で公にすることができたかどうか疑わしい内容だったと推測される。Kalhaṇaが1149/50年に書き終えたとされる『ラージャタランギニー』に第8章があったとすれば、これとはかなり異なるものであったに違いない。しかし、過去の出来事を語る際は仲裁者のように中立的であらねばならない、というKalhaṇaの言葉を信じるなら、政治的に無難な第8章が『ラージャタランギニー』の最終章であったとは考え難い。Kölver [1971: 82]は、第8章から161詩節が削除されていることを評して「Kalhaṇaの名高い客観性も、ローマの史書やインドの称賛詩 (prasaṣtis) に比べれば、という程度のものである」と言っている。しかし、Kalhaṇaが中立性を守り通したと自負しているのはおそらく第7章であろう。Kalhaṇaは第7章において、浅からぬ縁のあった第一ローハラ王朝最後の王Harṣaを公平な筆で描き切っているからである。

本稿で論じたことを総合すると、Kalhaṇaは1149/50年もしくはそれ以前に、第7章を最終章とする『ラージャタランギニー』を書き上げ、第1章冒頭に序文を付して世に問うたと考えるのが妥当であると思われる。第8章は、KalhaṇaもJayasimha王も死去した後、次世代の詩人達によって付け加えられ、更に改変されて複数のバージョンが存在することになったと考えられる³¹。

〈参考文献〉

一次文献

(Kalhaṇaの『ラージャタランギニー』 関連)

Durgāprasāda 校訂版

Durgāprasāda

[1892] *The Rājatarāṅgiṇī of Kalhaṇa* (ed. Durgāprasāda) Vol.I. Bombay.

[1894] *The Rājatarāṅgiṇī of Kalhaṇa* (ed. Durgāprasāda) Vol.II. Bombay.

Stein 校訂版

Stein, Marc Aurel

[1892] *Kalhaṇa's Rājatarāṅgiṇī or Chronicles of the Kings of Kashmir: Sanskrit text with critical notes*. Bombay.

Vishva Bandhu 校訂版

Vishva Bandhu

³¹ Kalhaṇaが残した未定稿が第8章のベースとなった可能性は否定できないが、その未定稿がどのような内容であったかを伝える情報はない。

[1963] *Rājatarāṅgiṇī of Kalhaṇa* (ed. Vishva Bandhu in collaboration with Bhima Dev. K. S. Ramaswami and S. Bhaskaran Nair) Part I. Hoshiarpur.

[1965] *Rājatarāṅgiṇī of Kalhaṇa* (ed. Vishva Bandhu in collaboration with Bhima Dev. K. S. Ramaswami and S. Bhaskaran Nair) Part II. Hoshiarpur.

カルカッタ校訂版

Asiatic Society of Bengal

[1835] *The Ra'jatarāṅgiṇī; History of Cashmir*. Calcutta.

(その他)

Kaul, Śrīkaṇṭha

[1967] *Rājatarāṅgiṇī of Jonarāja* (ed. Śrīkaṇṭha Kaul). Hoshiarpur.

二次文献

Bühler, Georg

[1877] *Detailed Report of a tour in search of Sanskrit MSS. made in Kaśmīr, Rajputana and Central India*. Extra number of the *Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society*.

Hultsch, Eugen

[1911] "Critical Notes on Kalhaṇa's Seventh Taraṅga." *Indian Antiquary* 40: 97–102.

[1913] "Critical Notes on Kalhaṇa's Eighth Taraṅga." *Indian Antiquary* 42: 301–306.

[1915] "Kritische Bemerkungen zur Rājatarāṅgiṇī." *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 69: 129–167.

Kölver, Bernhard

[1971] *Textkritische und Philologische Untersuchungen zur Rājatarāṅgiṇī des Kalhaṇa*. Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland: Supplementband 12. Wiesbaden.

Stein, Marc Aurel

[1900] *Kalhaṇa's Rājatarāṅgiṇī: A Chronicle of the Kings of Kaśmīr: translated, with an introduction, commentary, & appendices by M. A. Stein*. Westminster.

鈴木 知子 [2020] 「Rājatarāṅgiṇī の第 7 章と第 8 章を巡る問題の再検証」印度學仏教學研究第 68 卷第 2 号 1089–92 頁

『ラージャタランギー』の第 8 章について

〈Keywords〉 Rājatarāṅgīnī, Kalhaṇa, 王統紀, カシミール

すずき ともこ 東京大学大学院博士課程

On the Multiple Versions of the Eighth Chapter of Kalhaṇa's *Rājatarāṅgiṇī*

SUZUKI, Tomoko

The *Rājatarāṅgiṇī* (RT) is a royal chronicle of Kashmir composed by Kalhaṇa in the 12th century. Using 7,826 Sanskrit verses, Kalhaṇa described the behavior of Kashmiri kings beginning from legendary kings up to Jayasiṃha who was in throne when the RT was being written. Of its eight chapters, the seventh is mostly dedicated to Harṣa, the last king of the first Lohara dynasty, in whose court Kalhaṇa's father served as a minister. The eighth chapter is a contemporary witness of the second Lohara dynasty, forming more than 40% of the whole verses. A verse at the end of the eighth chapter suggests that the RT was finalized in 1149/50.

Early in the 19th century, the authenticity of the last two chapters was suspected by the scholars. This doubt was hastily denied by G. Bühler and M.A. Stein and never surfaced again. However, this issue should have been sought more deeply. The two chapters differ in the attitude of the author as well as in literally sophistication. Solely the eighth chapter had to be suspected of its authenticity.

The RT has been studied based mainly upon a manuscript (ms. A) which served as the basis of Stein's edition. It has been little acknowledged that, early in the 20th century, another manuscript (ms. M), though fragmentary, was examined by E. Hultzsch. In the eighth chapter of the ms. M, 7 verses in the ms. A were missing and 161 totally different verses were there. The then scholars took it for granted that the text was altered by Kalhaṇa himself, and only questioned which version was his final text. Since the 161 verses in question contained an episode which was certainly inconvenient to Jayasiṃha, it was concluded that Kalhaṇa first wrote the 161 verses, but later replaced them with the 7 verses for political reasons. Thus, the authenticity of the ms. A was not questioned.

If those 161 verses are examined carefully, however, a trace of removed verses can be recognized there also. The removed verses had likely been similar to the 7 verses of the ms. A. Seemingly, different verses had been removed from an identical or similar text. This means that at least three versions of the RT co-existed sometime in the past. Those altered texts were indifferent to the inconsistency resulting from the removal of verses, suggesting that these alterations cannot be attributed to the original author. Moreover, the original text, containing the 161 verses that offense Jayasiṃha, was probably made public after this king had passed away. Thus, the version of the RT preserved in the ms. A was not finalized in 1149/50 when Jayasiṃha was still alive.

The RT finalized by Kalhaṇa in 1149/50 would have ended with a politically prudent eighth chapter, or was without the eighth. It is doubtful whether Kalhaṇa, who says in the introductory part that past events should be narrated with subjective words, politically compromised in the last chapter. Rather, he was faithful to his credo in the seventh chapter, impartially describing King Harṣa who was closely related to his family. Further, *śānta rasa*, which according to Kalhaṇa governs the RT, comes to climax at the end of the seventh chapter where the tragic death of Harṣa is narrated.

These circumstantial evidences indicate that Kalhaṇa finalized his *Rājatarāṅgiṇī* ending with the seventh chapter in 1149/50 or earlier. The eighth chapter would have been added by later poets after both Jayasiṃha and Kalhaṇa passed away, and then varied in several ways.